

ドリルの位置づけとその活用方法

鈴木 庸子

はじめに

Japanese for College Students: Basic（以下 JCS と略す）の「Listening & Speaking」には、「フォーメーション」、「ドリル」、「ロールプレイ」の3段階の教室活動が含まれている。「フォーメーション」と呼ばれるパートは発音、語彙、文法の基礎的な口頭練習、「ドリル」と呼んでいるパートはやや場面を想定した運用練習、「ロールプレイ」はその次の段階としてのタスク練習と位置づけられている。

ここでは、この3種類の教室活動のうち、2番目の「ドリル」について次の観点から述べる。

1. JCSにおける「ドリル」の位置づけ
2. 「ドリル」の構成と内容
3. 「ドリル」の授業
4. 「ドリル」の留意点

1. JCSにおける「ドリル」の位置づけ

JCSでは、口頭練習を通して初級の日本語の語彙、発音、文法、運用を習得させようとしている。そのために、「フォーメーション、ドリル、ロールプレイ」の順に基本的な学習から、実際に「使える」ための学習に移るように意図している。したがって、「ドリル」は最も基本的な学習である「フォーメーション」と、最も現実の使用場面に近い「ロールプレイ」の間をつなぐものである。

別のことばで言うと、「フォーメーション」で最も基礎的な口頭練習を行い、「ドリル」でやや場面性のある状況で対話形式の口頭練習を行い、さらにいくつかの「ドリル」を組み合わせる形で「ロールプレイ」を行う、という学習の流れが想定されている。

2. 「ドリル」の構成と内容

「ドリル」のパートは、平均五つの短い対話で構成され、それぞれの対話を「ドリルI、ドリルII、…」のように呼んでいる。この対話は二人の人物のやりとりの形をとり、一人が1発話ないし2発話のものがほとんどである。そしてそれぞれの対話の機能と使用する場面が設定されている。また各対話に対して、別の場面や状況を想定して単語を入れ替えて練習するためのキュー（単語リスト）が用意してある。場合によっては、この単語リストがイラストによって用意されているものもある。対話の文の下線を付した単語が、入れ

替えを求められている単語である。

例1) レッスン1 ドリルV

A: あれは何ですか。

B: (あれは) 図書館です。

キュー (単語のリスト)

寮 食堂

「ドリル」で設定された機能は、各ドリルの番号の次に英語で示してある。例1では、「Asking for identification of objects」という機能の説明が記されている。場面は与えられているキューから、大学内で建物の案内を求めている場面が想像できる。また中には次の例2のように場面が明示されているドリルもある。ここでは、大学のキャンパスの中で、建物の中を案内するという場面が設定され、それが英語で書かれている。

例2) レッスン16 ドリルII Looking around rooms in a building on campus.

A: この部屋は?

B: あ、ここはコピーをする部屋です。

「ドリル」が想定している場面は、それぞれの「ドリル」によってごく限られた場面から、かなり一般的な場面まで、応用をきかせて使える状況にいろいろなはばがある。上記の2例は、キューを変えさえすればいろいろな場面に应用できる、自由度の高い対話の例である。ここでは「大学のキャンパス」が選ばれているが、その他に語彙を変えれば会社、家の中、観光地、交通機関などいろいろな場面が考えられる。このような自由度の高い対話に、大学の設備にかかわる語彙を添えて「大学内の場面」を設定したのは、対象を大学生としているために執筆者がそのように選択したにすぎない。

これに対して、次の例3や例4のような買い物の場面や電話をかける場面の場合、ドリルに応用の幅は少ない。

例3) レッスン6 ドリルIV Asking for things at a store

A: すみません。切手はありますか。

B: ありますよ。

A: じゃあ、50円のを5枚ください。

例4) レッスン26 ドリルIII On the phone: Asking if someone is there

A: もしもし、山川先生はいらっしゃいますか。

B: はい、おります。

各ドリルに与えられている入れ替えのキュー (単語リスト) は、その対話の場面を規定

することになるが、中には、学習者が自分のケースについて自由にキューを作れるようにしてあるものがある。上記の買い物の場面の対話では、「You decide how many you want.」という指示があり、学習者は必要な数を自分で考えて話さなければならない。このような例は、各自の好みや予定や判断を述べるときに多く、次の例5もそのひとつである。

例5) レッスン18 ドリルI-3 What if ~

A : もし1000万円あったら？

B : そうですね。もし1000万円あったら、外国に旅行したいですね。

あした休みだ テストがない	Give your own response.
------------------	----------------------------

このように、学習者に積極的に自分のケースについて発話させるのは、与えられたことがらでなく自分自身のことを「語る」ことによって、記憶を容易にし実際の場面で「使える」ようにするためである。

また、「ドリル」の対話の中には、あいづちのように会話を円滑に行うための表現が含まれている。文型とは異なるが、実際に対話が行われる場合に必要ながらとして、「ドリル」の中で、これらを学習することになっている。これらは、「expressions」(表現)と呼ばれ、各レッスンの初めに一覧が載せてある。次の例6の波線がこの表現である。例

6) レッスン9 ドリルIII Offering/Accepting/Declining help

A : わたしがしましょうか。

B : そうですか。じゃお願いします。 B : いいえ、けっこうです。自分でしますから。

また、この例6のように、二とおりの返事が想定される場合には、両者を並べて出している。学習者は、どちらの返事をするか自分で判断しながら対話練習を行うことになる。現実の会話であれば、必ずプラスとネガティブの両方の返事があり得るような場面では、なるべくこのような選択ができる形式をとっている。これは、学生が実際の場面をイメージしやすく、また実際にどちらの場合でもスムーズに返事ができるようにという意図に基づいている。

以上が「ドリル」の基本的な構成である。ここでめざしていることは基本的には「フォーメーション」で学んだ文法の規則を使って、現実の会話に近い運用練習を行うことである。

しかし、レッスンによって、文法の規則の習得に重点が置かれる場合と機能的な運用に重点が置かれる場合がある。文法の規則の習得に重点が置かれる場合は、次の例7のように「フォーメーション」の練習に近く、機能的な運用に重点が置かれる場合は例8のように「ロールプレイ」に近い形になる。

例7) レッスン24ドリルII Stating purpose

A: どうして／なぜ／何のために 日本に来ましたか。

B: 大学で勉強するために、来ました。

日本語を勉強します 日本の文化を知ります 研究	友達にあいます 日本語の勉強 ちょうさ
-------------------------------	---------------------------

例8) レッスン14 ドリルV Describing physical conditions / Giving advice

先生: どうしましたか。

学生: 頭がいたいんです。

先生: だいじょうぶですか。薬を飲んで休んだほうがいいですよ。それに、お風呂に入らないほうがいいですよ。

学生: はい。

先生: じゃ、お大事に。

おなかが痛い のどが痛い 気持ちがわるい 歯が痛い ねつがある	Give your own advice
---	----------------------

また、特に基本文型（NはNです、NはAです、NはVますなど）や親族語彙、敬語などを扱うレッスンでは文型と同時に語彙の練習もかねる形になる。

「フォーメーション」と「ロールプレイ」はある程度練習の形がはっきりしているが、「ドリル」はその間を埋めるために、その中間で最も必要な練習がいろいろな形式で行われると考えてよいだろう。

一口に「ドリル」と言ってもこのように性格の異なる対話練習が混在する理由は、学習項目自体のタイプが多様だということである。つまりある文法項目が会話の中で「使えるようになる」までに必要な練習の量とタイプが、項目によって異なるということである。

たとえば、上記の例7の場合には、「～ために」という表現を用いて目的を表わす副詞節を作る練習が組まれている。これは、対話の形式をとっているが、いわゆる「問答法」による文型練習に近いものである。この「～ために、～」の文型には、「1) plain form がすらすら言える、2) 名詞にかかる節が名詞の前にくる、3) 副詞節は、主節の前におかれる」という3種類のことがらが含まれている。しかも、「目的をあらわす」という抽象度が高い意味内容を持っている。これらのことがらは、特に語順の違う英語圏の学習者にとって、学習の負荷が高い項目である。しかも学習の段階としてもようやく名詞節の学習が終わってまもないところである。そのため、もっとも単純な形の対話として、例7のようなドリルが必要と言える。

これに対して、例8の「～たほうがいいです」の練習は、同じように形式名詞のまえに節が来る形式をもってはいても、意味内容が具体的な行為の動詞にかぎられ、形態は「～た、～ない」、後件は「いいです」のみしか用いない。そのため、副詞節の「～ために」に比べると形式の練習の負荷が少ないと言える。そのような場合には、「ドリル」のパートで、上記のようなロールプレイに近い、場面性の高い練習に進むことができる。そこで、この項目では、医者と患者の会話場面を導入し「具合をきき、アドバイスを与え、「お大事に」という定型表現で会話をくくる」という一連の会話の流れを扱うことが可能になっている。

3. 「ドリル」の授業

次に、「ドリル」のパートを実際に授業で教える場合について、簡単に述べる。

「ドリル」を教室でどのように扱うかについては、Teacher's Manual に具体的な説明があるので、ここでは、全般的な概要について説明したい。

まず、「ドリル」の授業の目的は、前の段階で覚えた言葉の形を、必要な場面にあわせて「言えるようになる」あるいは「使えるようになる」ということである。そこで、「必要な場面」を上手に提示することが肝要である。そのために、適切な絵パネル、OHP、実物、絵チャートなどを利用する。

授業では、教科書の「ドリル」のページに書かれていることを、「読み」ながら練習するのではなく、学習者が本当に「会話」をすることで、練習を進める。そのために教科書に載っているイラストなどを利用する場合も、OHPや絵チャートの形で使い、学習者の視線が教科書に縛られないよう、工夫する。ただし、学習者の家庭学習の便宜を考えて、教科書の何を練習しているのかは、明確にしておく必要がある。

学習者が、そのドリルで期待されている語彙や表現をまだ習得していない場合には、練習にあたって、若干の基礎的な語彙や表現の練習も必要である。また表現や決まった談話の流れを練習することが、そのドリルに含まれている場合には、学習のポイントを板書す

るなどして、それが学習項目であることを明示することが大切である。その点をあいまいにすると、学習項目が十分に練習されないまま、それまでに既に習得した文型や表現だけをつかってやりとりを行い、新しいことを何も習得しないで終わってしまう可能性がある。

4. 「ドリル」の留意点

「ドリル」を実際に授業で扱うにあたって次のような点に留意することが必要である。

1) 学習内容を明確にする

前の節で述べたように、「ドリル」で扱う対話の形式や内容は、そこで扱っている文法項目のタイプによって異なっている。「フォーメーション」に近い文型中心のもの、「ロールプレイ」に近い表現や談話の流れが中心のもの、初期の段階や敬語などの語彙中心のものなどが考えられる。そこで、そのドリルがそのレッスンの中でどのような位置づけをもち、どのような内容と形式をもっているかを認識することが大切である。そして、そのドリルで学習者に何を習得させたいのか、学習内容を明確にすることが大切である。

2) 「フォーメーション」で扱うことがらとのギャップに気をつける。

「フォーメーション」で扱う文法項目は、初級で学習すべき文型のリストをもとに選択されている。これに対して「ロールプレイ」は、初級で扱う必然性が高いと判断された機能や場面を中心に構成されている。そこでこの両面からの要請が「ドリル」のパートで衝突し、2点の問題を起こしている。一つは、「フォーメーション」で扱う文型のすべてが「ドリル」で練習されるわけではない、ということ、もう一つは「フォーメーション」から「ドリル」にうつるときにステップのギャップがある場合がある、ということである。

「フォーメーション」では扱うが「ドリル」で扱わない項目では、たとえば次のようなものがある。

レッスン3 1分, 2分, 3分.... (時間)

v-ませんでした。(動詞の過去形の否定の形)

で(手段, 方法を表す助詞)

レッスン5 の(準体言) (私のかさは, その赤いのです。)

レッスン11 ~ている間

レッスン17 ~なくてははいけません。

これらの項目は、文法知識の穴を作らないために提示されている場合と考え、理解項目として扱うのがよいと思う。また、そのレッスンのドリルに扱われなくても、その後のドリルで、他の文法項目と組み合わせた形で練習されるようになっている。

「フォーメーション」から「ドリル」にうつる場合のギャップが大きいのではないかと考える項目は、たとえば次のようなものがある。

レッスン7 ドリルII-2 動詞の辞書形を文の中で、しかも重文で使う

A：テニスは好きですか。

B：見るのは好きですが、するのはにがてです。

この時点までに動詞の導入は終わっているが、辞書形を文の中で使うのはここが初めてである。フォーメーションでは、「見るのが好きです」という形の練習をしているだけなのでいきなりこのドリルII-2を行うのはギャップがあると言える。

レッスン10 ドリルIV 誘いの意味で「～ましょうか (Shall we～?)」を使う。

A：クラスが終わってから何をしましょうか。

B：少し休みましょう。

A：それから何をしましょうか。

B：そうですね。少し休んでからテニスをしましょうか。

これまでに、申し出の意味で「～ましょうか」を導入しているだけなので誘いの機能として「～ましょうか」を練習するのは始めてである。やりとりの形で練習する前に、「誘いの機能」だけを取り出して練習する必要がある。

レッスン16 ドリルI 名詞節の主名詞を準体言の「の」でおきかえる。

A：あのう、電車にかばんを忘れたんですが。

B：どんなかばんですか。

A：黒くて、大きいのです。

準体言の「の」は、レッスン5で既習だが、フォーメーションで名詞節を作る練習をしたあとでは、いったん名詞節で答える練習（「黒くて大きいかばんです」）をしたほうがわかりやすい。

レッスン17 ドリルIV 「～してはいけないこと」という形を使う。

A：図書館でしてはいけないことは何ですか。

B：タバコをすってはいけません。

「～してはいけません」という「ですます体」から「～してはいけない」というplain formに変えることは、ルールの上ではすでに既習事項である。しかし、「～てはいけない」という表現は、「～でもいい、～なくてもいい、～なくてはいけない」などと形態の上でも意味の上でも混乱しやすく負荷の高い項目である。いきなり「してはいけないこと」という句を使うのは難しい。

レッスン28 ドリルI 「～られたんです」という形を使う。

A：うれしそうですね。何かあったんですか。

B：ええ、実は、先生にほめられたんです。

受け身の形は、まず活用形を習得し、さらに語順と助詞の関係を覚えるのに時間と練習が必要である。動詞の過去形は既習事項とは言え、「ほめられました」を「ほめられた」に変換するのは、この部分だけをとりあげた口慣らしの練習が必要である。

これらの項目は、特に「フォーメーション」と「ドリル」を別の教師が担当するような場合は気をつける必要があるだろう。「ドリル」の前に、数分間、このギャップを埋める文型練習をすれば、学習者を混乱させずにすむ。

5. まとめ

「ドリル」は、文の基本的な形の練習とそれを実際の場面を想定して使う練習の中間に位置づけられる。そのために基本的な練習から応用的な練習までいくつかの形式や内容があっかいながら、この両者の間をうめようとするものである。なるべく学習者の負担が少ないように基本的な練習から応用的な練習に流れることが理想的な形である。そのためには教師が適宜必要な練習を補うことが必要である。また、学習者の環境によって、学習者にとって重要度の高い単語や表現を補うこと、また不要な項目を省くことも考えてよいのではないだろうか。たとえば、東京郊外に設定されたドリルは学習者のいる地域に、大学は会社や家庭に変えて練習する、などの変更があってもよい、というよりもむしろ重要なことではないかと思われる。